

論文の和文要旨	
論文題目	参照点構造に基づく「ノ（ダ）」の意味研究
氏 名	高 甜（コウ テン）
本稿は日本語教育文法の立場から、現代日本語における「ノ（ダ）」の意味を認知文法の参照点構造（Langacker 1993）を用いて説明することを目的とする。背景として、日本語学においては 1950 年代以降、「ノ（ダ）」の形態論・意味機能・統語構造に関する研究が蓄積されてきた（三上 1953, 寺村 1984 など）。しかし、これらの成果は外国人学習者向けの日本語教育に直接結びにくいという指摘がなされており、特に「ノ（ダ）」の使用・不使用やその多義性、文脈依存性が習得の難しさの要因とされている（菊地 2000, 庵 2013 など）。学習者向けの記述では、「関連付け」「前提－焦点関係」「情報の発見」といった説明が提案されているものの（庵 2021）、その背後にある具体的な関連性のメカニズム（守屋 2015）や、「ノ（ダ）」の多様な意味間の移行関係の説明には限界が認められる。つまり、従来の構造的説明は一般性が強く、各意味間の移行関係や実際の使用場面への適用に課題が残されている。 こうした問題意識を踏まえ、本稿では「ノ（ダ）」の認知プロセスと実際の言語運用に重点を置き、参照点構造を新たな分析枠組みとして導入した。具体的には、以下の三つの研究課題を設定し、分析を進めた。第一に、「ノ（ダ）」文の認知プロセスと多様な意味間の移行関係を明らかにする（第 5・6 章）。第二に、二種類の参照点構文の関係と「ノ（ダ）」文の位置づけを明確にする（第 7 章）。第三に、すべての用法に共通する中核的な意味を導き出し、「ノ（ダ）」の多義性の全体像を説明する（第 8 章）。これにより、「ノ（ダ）」の多義性を直観的に理解しやすい体系を提示し、文脈依存性の解釈や産出メカニズムへの適応性を高めることで、日本語教育における実践的課題の解決に寄与することを目指す。 本稿の構成は全 9 章からなり、以下に章ごとの概要を述べる。 第 1 章は序論であり、研究の対象、背景、目的、研究方法、研究課題と全体の構成を示した。 第 2 章では、「ノ（ダ）」に関する先行研究を分析視点ごとに整理した上で、これまでの研究の成果と未解決の問題点を明確にした（表 2-15）。 第 3 章と第 4 章は、先行研究の成果を継承しつつ、新たな分析枠組みの構築を進めた。 第 3 章では、従来の分析枠組みである「主題－解説」構造に着目し、「ノ（ダ）」文の構造を検討した。まず、「ノ（ダ）」文の「主題」が日本語における主題の一部に過ぎないこと（「主題」⊂主題）、また「無題文」に近い位置にある「状況陰題」（佐治 1991）として位置付けられることを明らかにした（図 3-5）。この認識に基づき、従来の「主題－解説」構造による説明の有効性と限界（表 3-2）を提示した。その限界を解消するための試みとして、一般的な主題－解説構造による「ノ（ダ）」文の説	

明を検討したが、依然として説明が不十分である且つ新たな問題が生じる可能性があることが明らかとなった。

第4章では、従来の「主題－解説」構造および一般的な主題－解説構造では説明しきれない課題を補うため、本稿で採用する新たな分析枠組みを検討した。まず、認知言語学のアプローチを採用する理由について説明し、参照点能力の実在性および普遍性について神経心理学的知見をもとに論じた。次に、従来の分析案との関連を踏まえ、参照点構造を用いた「ノ（ダ）」文の説明可能性を検討した。さらに、ラネカーの参照点構造に基づき、二種類の参照点構造（図 4-11c・d）を提案し、それぞれの認知プロセスについて説明した。これらの考察を通じて、本稿の分析枠組みが明確化された。

第5章から第8章は、上記の分析枠組み（二種類の参照点構造）に基づき、「ノ（ダ）」文の具体的な分析を三つの研究課題に沿って行った。

第5章では、モノ参照点の構造を導入し、モノ参照点を持つ「ノ（ダ）」文の認知プロセス、具体的な表現効果および特徴を明らかにした。まず、モノ参照点の「ノ（ダ）」文の認知プロセスについては、図 5-2 で示された意味構造を提案した。次に、モノ参照点の「ノ（ダ）」文の表現効果については、7種類を整理した（表 5-1）。これらの表現効果は、「モノRとコトTが内的関係にある」点と、「「ノ（ダ）」によってコトTを際立たせる」点で一貫しており、図 5-2 の意味構造によってモノ参照点の「ノ（ダ）」文を統一的に説明できることが実例の分析を通じて確認された。さらに、モノ参照点の「ノ（ダ）」文の特徴を①「ノ（ダ）」疑問文と②非「ノ（ダ）」文との比較を通じてさらに精緻化した。特に、第6章のコト参照点を持つ「ノ（ダ）」文の特徴とは大きな違いが見られた。

第6章では、コト参照点の構造を導入し、コト参照点を持つ「ノ（ダ）」文の認知プロセス、具体的な表現効果および特徴を明らかにした。まず、コト参照点の「ノ（ダ）」文の認知プロセスについては、図 6-1 で示された意味構造を提案した。次に、コト参照点の「ノ（ダ）」文の表現効果については、8種類を整理した（表 6-1）。これらの表現効果は、「コトRとコトTが外的関係にある」点と、「「ノ（ダ）」でコトTを際立たせる」点に共通しており、図 6-1 の意味構造によってコト参照点の「ノ（ダ）」文を統一的に説明できることが実例の分析から支持された。さらに、8種類の表現効果の中で見出した二種類のコト参照点構文について、お互いの連続性および分岐点を考察した上で、コト参照点の「ノ（ダ）」文の特徴を①「ノ（ダ）」疑問文と②非「ノ（ダ）」文との比較を通じてより精緻化した。

以上の考察を通じて、研究課題1、すなわち【「ノ（ダ）」の認知プロセスおよび「ノ（ダ）」文における多様な意味間の移行関係】が明らかとなった。

第7章では、「モノ」と「コト」という二通りの参照点の捉え方が可能な現象に焦点を当て、それに伴う「ノ（ダ）」文の意味変化のメカニズムを明らかにした。具体的には、まず、参照点の二通りの捉え方とそれに伴う「ノ（ダ）」文の意味変化を多義性の有無に分けて考察し、参照点のプロファイル・シフトが重要な役割を果たすことを示した。次に、参照点のプロファイル・シフトがどのように起こるかを考察

し、コト参照点が優位に立つことが確認された。その背景には、認知的要因および日本語の言語的特徴があることを説明した。さらに、コト参照点の優位性を踏まえ、参照点構文の類型（野村 2020）に基づき、「ノ（ダ）」文を「コト参照点－コト目標」のタイプとして位置付けることを提案した。以上の考察により、研究課題 2、すなわち【二種類の参照点構文の関係と「ノ（ダ）」文の位置づけ】が明らかとなった（表 7-2）。

第 8 章は、前章までの「ノ（ダ）」文の分析を踏まえた総合的な考察である。特に、認知文法で重視される百科事典的意味観に基づき、「ノ（ダ）」形式の中核的意味とその多義性の全体像について考察を深めた。その結果、従来の見解である「関係づけ」が、「ノ（ダ）」形式と百科事典的意味の相互作用によって生じた意味であることを示し、「ノ（ダ）」形式の中核的意味が「認知的際立ち（cognitive salience）の標識」にあることを明らかにした。この捉え方により、「関係づけ」だけでなく、非「関係づけ」や「いきなり「ノ（ダ）」文」、「談話における「ノ（ダ）」文の連鎖」といった多様な言語現象を統一的に説明できることが示された。さらに、多義性の分析における四つの課題に沿って、多義表現である「ノ（ダ）」の全体像を明らかにした。これにより、研究課題 3、すなわち【「ノ（ダ）」の中核的意味と全体像】が達成された。

第 9 章は結論であり、「ノ（ダ）」の使用に繋がる意味記述（理解と産出）を目指して、第 5 章から第 8 章までに行った分析・考察の結果を図 9-1 に示した。「ノ（ダ）」形式は、認知的際立ちの標識であり、二つの存在に関係性があるか否か、あるいはどのような関係性があるかは、百科事典的知識に基づいて得られた認識・判断に依存するものであり、「ノ（ダ）」そのものが直接「関係づけ」を行うわけではない、というのが本稿の主張である。

本稿は、「ノ（ダ）」の使用に繋がる意味記述を目指し、人間の認知との関わりにおいて参照点構造の観点から「ノ（ダ）」の意味研究を試みた。「ノ（ダ）」の多様な意味が参照点構造とその基盤にある「認知的際立ち」によって統一的に説明可能であることを示した。また、認知的アプローチは、学習者の認知能力や主体性を促す点において、日本語教育への応用可能性が高いことも示唆される。本稿で得られた知見は、今後の日本語教育の現場において、文法のほかにも、学習者の表現意図を配慮しながらの指導や、使用場面と関連付けながらの説明に役立つと考えられる。

今後の課題としては、①「ノ（ダ）」形式の考察範囲を広めてさらに分析を深めること、②分析に使用したデータをバランスよく充実させること、③学習者の使用実態や教科書の分析など、実用的な観点からの分析を進めることが挙げられる。